

社寺建築技術の継承 —納骨堂への活用—

1150012 井上 雅世

高知工科大 システム工学群 建築・都市デザイン専攻

Key Words: 宮大工, 社寺建築, 伝統的架構法, 日本の空間表現, 納骨堂

1. 設計の背景：宮大工の現状

宮大工とは、社寺の建築や補修に携わる大工のことである。渡り大工とも呼ばれ、現地で材料と技法を検討しながら仕事を進める。その技術は、徒弟制度という形で師匠から弟子へ口伝で継承される。

しかし、社寺の伝統的な建築を行う宮大工は、現代において減少傾向にある。

日本の建築において、戦前は木組み工法が主流であったが、現代では RC 造や鉄骨造が広く普及し、木造建築においても、在来工法やツーバイフォー工法が主流となっている。社寺の新築工事自体が減少している中、コストなどの問題から、伝統的な木組み工法によらず、近代的な工法による建築が行われるケースも多い。そのため、新築工事においての宮大工の需要は、減少の一途である。

また、その特殊な職業性から後継者不足も問題だ。

2. 設計の目的

本設計では宮大工の伝統技術を後世に残していくために、その技術を活用した建築物を考案することを目的とする。設計対象は現代でも需要がある社寺関連の建築：納骨堂を選定した。伝統技術による全く新しい建造物を考案することは難しいため、既存の寺・神社を参考にして設計を行う。

3. 設計の指針と方法

3-1. 納骨堂の設計指針

伝統技術を継承しつつも、その新しい可能性も提示することが必要である。ここでは提案する納骨堂の設計指針を以下に記す。

- ①伝統的架構の組み合わせで魅せる空間
- ②神秘性（求心性と上昇性）の空間表現
- ③光と闇による新しい日本建築空間

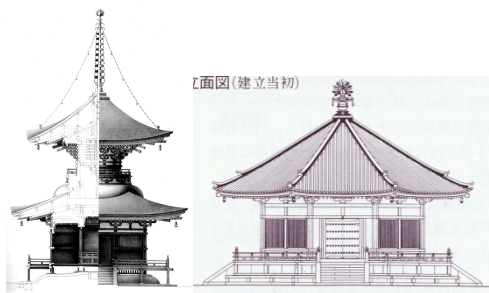
ここでは複数の架構法を組み合わせ統合し、その架構美で魅了する。同時に納骨堂の本来的な在り方も提示する。現在の納骨堂は合理性を重視しすぎて、ロッカーが並べられただけのようなものが多い。納骨堂とは納骨するだけでなく、人々が死者を弔い、祈りをささげる場所であり、自然と手を合わせるような神聖さが必要である。神仏像によらず、空間そのものの神秘性を追求したい。また、闇に沈む空間が主である日本社寺建築に光と闇の対比による神秘表現を導入する。

3-2. 納骨堂の構成方法

納骨堂は以下の段階をへて構成される。

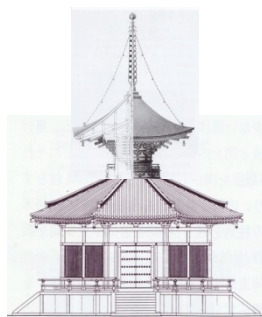
- ①参照社寺建築の選定
- ②選定社寺建築の複合と統合
- ③統合建築の架構法の決定
- ④細部の調整

納骨堂は精神的な中心に集う求心性と、彼岸の光を仰ぎ見る上昇性を兼ね備えた空間を目指す。そこで、上昇性を示すものとして石山寺多宝塔、求心性を持つ空間として法隆寺夢殿を選定した。



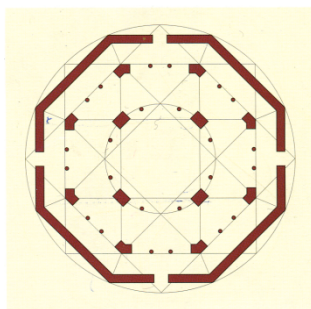
石山寺多宝塔と法隆寺夢殿

次に多宝塔の上昇性、夢殿の求心性をともに満足するように立体的に重合させると下図のようになる。



多宝塔と夢殿の組み合わせ

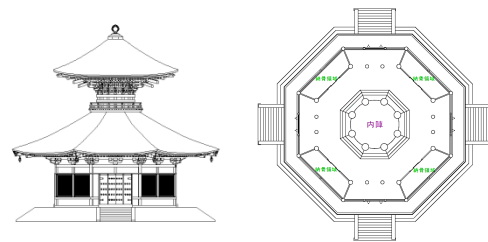
夢殿の平面構成は八角形を基本としつつ、さらに幾何学的な美的構成を高めるために「岩のドーム」の芯線を参照する。



「岩のドーム」の芯線

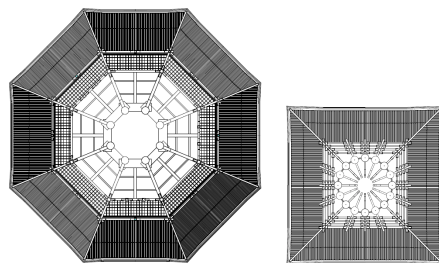
下層と上層は吹抜を介して連結することで日本建築としては稀な上昇的空間を実現させる。

4. 納骨堂の空間



納骨堂の立面と平面図

上層から自然光が吹き抜けを介して注ぎこみ、一方、下層の光は連子窓で抑制する。吹抜の垂直空間を活かすため、通常は心柱を建てる多宝塔から、それを取り払い、円状に通し柱を配した。中心にいくにつれて丸柱の太さ(400,600,800)を大きくし求心性を高める。逆に納骨領域は八角堂の縁に設置した。納骨堂へ入るときは明るく上昇性ある中心へ、その後、振り返った先にはほの暗い納骨堂が人々を誘う。夢殿の天井は全て格子で覆わず、敢えて小屋組構造を見せ伝統技術の架構美で魅了する。



下層見上げ図と上層見上げ

5. まとめ

既存の社寺を立体重合し、その架構美で魅せることで既存の社寺を基礎にしつつそれを超える空間ができた。納骨堂としては、その精神性が求心性と上昇性に結晶し、新たな日本的空間を提示できた。これを機に、伝統的技術の継承と、その未来への輝かしい展開が訪れること切に願いたい。